

内外交差点

検討から実装のフェーズへ移行 「日常の移動」を根付かせる年に向けて

高原 幸一郎氏 (NearMe代表) 第10/12回

2025年を振り返ってみると、移動を巡る議論が、「検討」から「実装」へと移行し、ようやく現場の足元まで降りてきた一年だったと感じています。これまで制度や構想について語られる時間は長くありましたが、昨年はそれらを実際に地域でどう動かすのか、という点がより具体的に問われるようになりました。国土交通大臣の指示に基づいて始まった交通空白解消・集中対策期間の初年度として、移動の問題が特定の地域や一部の人の課題ではなく、社会全体で向き合うテーマとして整理された年だったと、私自身、現場で強く感じています。26年は、こうした流れを受け、これまで実証を重ねてきた取り組みを、「日常の移動」として地域に根付かせていく年になると想っています。インバウンド需要の急回復によって、都市部や観光地では移動需要が一気に高まりました。一方で、地方では担い手不足や公共交通の縮小が続いています。こうした状況を見ていると、「交通空白」は地方か都市かを問わず、昼か夜かも関係なく、どこにでも現れ得る構造的な課題になってきていると感じます。バスや鉄道の減便、既存輸送資源の再活用、日本版ライドシェアなど、さまざまな対応策が同時に進む局面に入ったと言えるでしょう。

当社は、国土交通省の複数プロジェクトに参画し、既存のタクシー車両を活用した相乗りの実装モデルについて検証を進めてきました。一貫して大切にしてきたのは、新しい乗り物を増やすことではなく、限られた車両や人材を、時間帯や地域の特性に合わせて、どう生かしていくかということです。その点を常に考えてきました。

制度面でも、25年は重要な転換点となりました。規制改革推進に関する答申では、地方の移動課題や空港アクセス、観光需要への対応を見据え、乗合タクシー制度の見直しや要件緩和の方向性が示されました。地域公共交通会議における調整を円滑にするための整理も進み、現場で取り組みを進める立場としても、制度環境が整いつつあると感じています。こうした制度の動きは、限られた移動資源をいかに効率的かつ持続的に活用するかという「質」の課題に、社会全体が向き合うフェーズに入り始めたことを示していると感じています。私たちがこれまで積み重ねてきた「シェア乗り」の実装や運用の考え方も、そうした流れの中で、徐々に広がり始めていると受け止めています。そんな1年の中で、ニアミーが

象徴的な取り組みの一つとして行ったのが、30年を見据えた事業戦略説明会の開催と、ブランドメッセージの刷新です。「予約でおトク、ラクちん。」とい

うメッセージには、移動を特別なものにせず、暮らしの中に自然に溶け込ませていきたいという思いを込めました。併せて、サービスとしての提供価値をあらためて整理し、個人向けのサービスにとどまらず、ホテルや旅行代理店、さらには行政との連携など、t o B・t o Gを含めた展開を進めていく方針を明確にしました。こうした整理を通じ、地域の移動課題に向き合うITモビリティパートナーとしての立ち位置を、あらためて定義づける機会にもなったと感じています。

発表会では、日頃から移動課題の解決に向けてご一緒しているパートナーの皆さんにも登壇いただき、ニアミーとのこれまでの取り組みや、2026年以降を見据えた今後の展望について、それぞれの立場からお話しいただきました。地域交通や観光、都市部の移動など、多様な現場の視点を通じて、ニアミーの取り組みが単独のサービスにとどまらず、より大きな文脈の中で広がっていく可能性を、あらためて実感する機会となりました。さらに、国内での取り組みにとどまらず、海外から日本を訪れる方々の移動体験や、国境を越えた連携の可能性についてもお話ししました。ニアミーならではの価値を国内外に届けていく。その姿勢を示す場にもなったと受け止めています。26年は空港送迎や夜間交通といった取り組みを点で終わらせるのではなく、駅や空港などの交通結節点を起点に、地域全体の移動としてどう機能させていくのかが問われる年になります。これまで培ってきた独自AIを活用した相乗りやルーティングの知見を生かし、既存交通と組み合わせた現実的な運用モデルを磨き込んでいきます。自動運転を巡る議論や実証が各地で進む中でも、既存交通とどう共存していくのかという視点は欠かせません。

私たちが目指しているのは、ドアツードアの移動が特別なサービスではなく、「あるのが当たり前」の移動として地域に根付いていくことにほかなりません。26年も当社は、「暮らしの『もったいない』をなくし、『次のあたりまえ』をつくる。」というミッションのもと、交通事業者や自治体、企業などのパートナーと連携しながら、現場で実装できる取り組みを一つひとつ積み重ねていきます。その先に見えてくる中長期の未来像については、まず現場での実装を積み重ねた先に見えてくるものとして、次の議論につなげていきたいと考えています。

